

第7回 大賞(金の星賞)受賞作品

「鏡に映る夢」

山形県立新庄南高等学校 2年 武田啓太



賢治のまちから
高校生★童話大賞

大賞へ金の星賞へ

山形県立新庄南高等学校 二年 武田啓太

『鏡に映る夢』

嫌な夢を見た。真つ暗で誰もいない広い場所で、マントをはおった青白い顔の男に、

「嘘をつけばお前は消える。」

と何度も何度も言われ続ける夢だ。

おかげで最悪な気分の朝を迎えた。ベッドから上半身を起こし、ボーツと天井を見ていると一階から母の呼ぶ声がした。

「正一っ。もう起きなさい。」

そうだ、今日は月曜日で学校だった。時計を見ると七時五十分、いつもならもう家を出発する頃だった。もうそんな時間なのかと気付くと、なんだか急に学校に行くのが嫌になってきた。

しばらくベッドの上でボーツとしてしていると、階段を駆け上がる音がして、ムツとしたような顔の母が部屋のドアを開けて入ってきた。

「何時だと思ってるの。何度呼んでも起きないんだから。」

母はそう言うと言った手に持ったハウキで床をドンツとたたいて見せた。

「なんだか体がだるくて気持ち悪いんだ。」

そう言うと言った僕はできる限り弱々しく動いて見せた。すると母はちよつと心配そうな顔つきになり、僕のオデコに手を当てて自分と熱を比べながらこう言った。

「熱は無いみたいね。でも心配だから学校は休んで寝てなさい。」

言い終わると母は僕の布団を掛け直した後、忙しそうに部屋を出て行った。もちろん僕は仮病だった。学校がメンドクサイとき、よく使う手段だ。

しばらく二度寝をした後、一階から元気良く、

「行ってきまーす。」

という妹の恵美の声があった。今年やっと小学校に入ったばかりだから学校が楽しくて仕方ないのだろう。そんなことを考えていると母が部屋のドアを半分ほど開けて顔を出した。

「それじゃ、お母さん仕事に行くからおとなしく寝てるんだよ。お腹がすいたら冷蔵庫に食べ物があるからチンして食べてね。」

僕がうなずくと母は静かにドアを閉めた。

我が家は父、母、僕と妹の四人暮らした。両親とも共働きだったので今家には僕しかいなかった。ようやく一人になれた僕はベッドの上でおもいっきり伸びをする。そして部屋を出て一階に降りて行った。

お風呂場へ行き、その洗面所で僕は顔を水でジャバジャバと洗った。タオルを手に取り、顔をふく。そのときふと目の前の洗面台の小さな鏡が目についた。朝の、

「嘘をつけばお前は消える。」

という夢が頭をかすめる。まさかなと思いつつその小さな鏡をまじまじとながめた。小さな鏡なので上半身しか映らなかったが見た限り消えている所なんて無かった。ちよつと安心したような拍子抜けしたような思いだったが、気にせず僕はお風呂場をあとにした。

冷蔵庫のもので簡単な朝食を済ませた後、僕はズボンだけをパジャマから着替え、サンダルをはいてこっそりと家のうらにある河原へ向かった。

河原につくとそこはいつも通りひっそりとしていて、人の気配はすこしも感じられなかった。僕はその河原の鉄橋の下へ勢いよく走って行った。

鉄橋の下にはポツンと小さくてすこしボロイ犬小屋がある。僕がそれに近寄ると、中からフワフワの白い毛並みの子犬が一匹、うれしそうにしっぽを振りながら飛び出してきた。僕はその子犬を抱き上げると体中をなでまわした。子犬はうれしそうにちぎれそうなほど強くしっぽを振った。

この犬は去年の冬、小さなダンボールに入って丸まっているのを僕と恵美が見つけたものだ。両親が二人共犬嫌いで、家で飼うことはできないだろうと僕と恵美で内緒で飼っているのだ。ちなみに名前は冬にひろったことと雪のような真っ白な毛の色からユキと名付けた。

僕はしばらくユキにエサをあげたりボールを転がして遊んだりしていたが、しばらくしてユキの犬小屋の横に何か大きな物があるのに気付いた。

—なんだ？

おそろおそろ近寄って正面から見るとそれは大きな全身の映る鏡だった。この場所は人があまり寄りつかず、そういうものが捨てられていてもおかしくはなかった。すこし薄気味悪い感じがしたが僕は好奇心に負けてその鏡の正面に立った。

鏡を見た瞬間、僕は思わず飛び上がってしまった。

鏡に映っていたのは同じように驚いた顔で上半身パジャマでサンダルをはいた右足の無い僕だった。

その後のことは詳しく覚えてないがすぐに家に帰って頭から布団をかぶりずっと寝ていたんだと思う……。

帰って来た母にご飯だとゆり起こされた。

「大丈夫？ ご飯は食べられそう？」

と心配そうに尋ねる母に僕は、

「うん、もう大丈夫だよ。明日からは学校に行けそうだよ。」

と答えると大きくあくびをし食卓へ向かった。

あれは気のせいなんだ……きつとそうだ。

次の日、僕はいつも通りの時間に起き、いつも通り顔を洗いご飯を食べ歯をみがいた。鏡を決して見ないようにしながら。

学校では同じクラスメイトがワイワイと楽しそうに会話を交わしていた。

僕はそれを横目で見ながらカバンから教科書を取り出し机に押しこんでいた。とても一緒に騒げる心境じゃなかった。

ホームルームが終わって僕がトイレ行こうと廊下に出た時、急に後ろから声をかけられた。

「正、ちよつといいか？」

荒川先生だった。荒川先生は僕にちよつとついてこいと言って僕の前を歩きはじめた。なんだろうと不思議に思いながらついていくと、先生は誰もいない理科室に入っていった。

中に入ると荒川先生が座っていて、僕にイスを渡してきた。僕がそれに座ると、荒川先生は僕の顔をすこしながめた後、口を開いた。

「お前、もしかして昨日家にいなかったんじゃないか？」

僕はドキツとした。なんで知ってるんだ？ どうして？ そんなことを考えていると先生はこう続けた。

「昨日先生が用があって車でお前の家の近くを通りかかったとき外で遊んでるお前が見えたんだ。」

僕はそれを聞いて軽くパニックになった。どうしよう。どうしよう。そんな慌てた頭で僕がようやく口にできたのは、

「知りません。別の人なんじゃないですか？ 僕じゃないですよ。」

・・・なんとも情けない嘘だった。しつかり現場まで見られて言い逃れなんてできないこんな状況なのに。

荒川先生は僕のこの言葉を聞くとすこし悲しそうな顔をしながら僕の顔をじっと見つめてきた。僕がそれに耐えられずに視線を下に落とすと荒川先生は、

「そうか、わかった。時間をとってすまなかったな。もう戻っていいぞ。」

と言って奥の準備室に入ってしまった。僕はちよつと複雑な気分になりながら理科室を出て教室に向かった。

その後あまり身の入らない授業を三つ受けた後、僕は次の四時間目が理科だということによく気付いた。理科は荒川先生が担任だった。どうにも荒川先生と顔をあわせづらかった僕は保健室で具合が悪いといって寝ることにした。お昼も保健室にいれば給食のときも顔を合わせずに済むだろう。

「失礼します。」

僕がそう言いながら保健室に入ると奥にいた保健の雅子先生が優しく声をかけてきた。

「どうしたの？ 具合が悪いの？」

「ちよっと頭が痛くて気持ち悪いんです。ベッドで寝かせてもらえませんか？」

僕がそういうと雅子先生は、

「風邪かな？ ならあのベッドを使って。それとこれで体温をはかっという。と体温計を渡してくれた。そして部屋を出ていった。僕は熱など無いのは知っていたが、一応体温をはかった後、ゆっくりと温かい毛布にくるまって寝た。

気が付くと僕は真っ暗な場所にいた。

隣にはマントをはおった青白い顔の男がいた。男はこちらに顔を向けるとこんな事を言いはじめた。

「・・・鏡から、お前の姿が全て消えた時、お前はこの世から消える・・・。」
眼が覚めた時、僕は全身に嫌な汗をかいていた。

二度もあんな夢を見るなんて。

そう思っていると保健室の全身を映し出せる大きめの鏡が目に入った。

あれは夢だから大丈夫。消えるなんてことはない。

そう自分に言い聞かせて僕は鏡の前に立った。そこにいたのは首だけの僕だった。

僕は声も出ないほど驚いた。やっぱり僕の体は消えていつてる。しかももう頭しか残っていない。きつと後もう一度嘘をつけばこの残っている頭も消えてしまう。そうなったら僕は……。もうのんきに寝ている気分にもなれずに教室に走った。

教室では掃除も終わり後は帰りの前のホームルームだけを残す生徒達が楽しそうに笑っていた。誰かに相談したらいいかもしれない。そう考えたが、下手なことをして消されたらということが頭をよぎり、結局誰にも相談できなかつた。荒川先生と顔をあわせる時間だが、僕はもう夢のことで頭がいっぱいだった。

ホームルームが終わり、みんながそれぞれの部活に急ぐなか、帰宅部である僕は泣きそうな心境でノロノロとカバンに教科書をつめこんでいた。いつしか教室は僕一人になっていた。

すると急に教室のドアが開き、荒川先生が入ってきた。先生は僕の前の席に座ると優しくほほえみながら声をかけてきた。

「正、知ってるか。嘘っていうのはな、なんでも悪いもんだけじゃないんだぞ。嘘にもな、良い嘘と悪い嘘があるんだ。真実で誰かが傷ついてしまうとき、その人を傷つけないように使うのが良い嘘だ。だからな、嘘はついてもいい。しかし使っているのは良い嘘だけだぞ、約束だ。」

そう言うと先生は僕に再びほほえんだ後、ゆっくりと教室を出ていった。

嘘がばれていたこととそれでも優しい言葉をかけてくれる先生のことでは僕は自分が恥ずかしくなった。

僕は家に帰ると少しでもこの気持ちを落ちつけたくてユキに会いに行った。河原についた僕は鉄橋の下の犬小屋に走っていった。しかしいつもなら犬小屋に近づくだけで出てくるユキが見当たらなかつた。不思議に思い、探してみると小屋の後ろにユキはいた。しかしなんだか様子がおかしい。ピクリとも動かず、舌をだらりと垂らして寝ころんでいた。近づいて名前

を呼びゆすつてみたがユキはまったく反応しなかった。

僕はこのとき初めてユキが死んでしまっていることに気付いた。おそろおそろ冷えたやわらかい体に触れる。僕はただ悲しくて、一人でユキのそばにたたずんでいた。涙が止まらなかった。どうして死んでしまったのか理由もわからなかった。僕はユキを犬小屋からちよつと離れた土の多い場所へ運び、そこに埋めた。すこしだけそこに土の山をつくり、そのてっぺんに木の棒をさした。僕はそのお墓に手を合わせた後、重い頭と空洞の心を抱え重い足どりで家に向かおうとした。すると急に声がした。

「お兄ちゃん。」

妹の恵美だった。僕はどうしようとあせってしまった。恵美はユキのことを僕以上に可愛いがり、本当に大事にしていた。

「ユキはどこ？」

そんな僕に追いうちをかけるように恵美が尋ねてきた。

本当にどうしよう。もし本当のことを知ったら恵美は耐えられるだろうか。いや、きつと無理だろう。あんなに可愛がってきたのだから。でも僕はもうごまかすことはできない。だってきつと後一度嘘をつけば僕は消えてしまうから。

「実はね恵美、ユキはもう……。」

そこまで言ったときふいに荒川先生の教室での話が頭をよぎった。僕が言葉につまんでいると恵美は泣きそうな顔でこう言った。

「ねえ、ユキどうしちゃったの？」

それを見たとき、僕はある決心をした。

「ユキはもう本当の飼い主と親犬のところに帰ったんだ。ついさっきむかえに来てね。でも悲しんじゃだめだよ。本当の親と飼い主と暮らせるのはユキにとつて本当に幸せなことなんだから。」

この言葉を聞いたとき、恵美は一瞬泣きそうになったがすぐに袖で涙をふ

き、

「そうだよ。ユキは本当のお父さんとお母さんに会えたんだもんね。幸せだよ。うん、私泣かないよ。」

とびっきりの笑顔でそう言う。と恵美は僕に背を向けて家に向かって思いっきり走って行った。

僕は一人になると、急に目まいがして景色が揺れはじめた。

ああ、いよいよ僕は消えるんだな。

そう思った瞬間急に視界が全て真っ白になった。

気付くと朝だった。

僕はベッドからはね起きると自分の体をくまなく見つめた。そして着替えもせずに河原へと全速力で走った。そして鉄橋の下の犬小屋をのぞくと、中にはユキが気持ち良さそうに鼻息をたてながら寝ていた。

これは一体どういうことなんだ？

すっかり混乱した僕の視界のすみに前に見つけた大きな鏡があった。僕がおそるおそるそれをのぞくと、鏡の中の僕は足りない所のない完璧な姿で映っていた。手も足もある、頭だって胴体だって欠けたところなんか一つもない。でも顔だけは前とすこし変わっているみたいだった。ちよっとだけ大人びた顔つきのように、見えた気がした。